神話学の視点から

異界の神話学 —海の異界を中心に—

松村　一男

一　浦島太郎

『万葉集』から古代日本における異界観を探ろうとすると、高橋虫麻呂の詠んだ「水江の浦島の子」の歌（巻9・1740、1741番）がまず思い浮かぶ。浦島太郎については他に、『日本書紀』雄略天皇22年7月条と、『風土記』では丹後国逸文（『釈日本紀』巻12記載）に記述がある。いずれも専門家はもちろん、日本人の多くが親しんでいる伝承であるので、ここではあえて引用しなくてもよいだろう。蓬莱山とか常世とか中国的な表現が目につくから、中国から伝わったモチーフであることは間違いない。

有名な異界訪問譚ではあるが、ではどのように理解したらよいのかというと案外難しい。分類することは位置づけの大切な手続きだろうが、意味のある分類をすることはこの場合容易ではない。たとえば、異界訪問譚には成功型と悲劇的結末型の二種類があり、浦島太郎は後者に属するという意見がある。(1) また、この話は確かに異界訪問譚だが、神仙伝奇小説の影響を受けたもので、その思想や表現からして、より伝統的な記紀の海幸山幸神話とは異質であると考えるべきだという説もある。(2) 前者は区別の効用について述べていない。単なる分類では意味がないだろう。後者は国文学者としてもっともな指摘である。しかし大林太良の論考から以下に引用する、君島久子が採集したとされる中国内陸の湖沼地帯の民話「洞庭湖の竜女」には、浦島太郎と海幸山幸の中間様態が示されている。異質だという区別だけでは、こういう例は扱えないだろう。

「洞庭湖の漁夫が、あるとき難破する小舟に乗った娘を助けたが、彼女はじつは洞庭湖の竜女だった。娘はお礼に漁夫を竜宮城に招いた。漁夫は娘からもらった分水珠をもって湖中にはいったところ、水は左右に分かれて一条の道ができ、男は竜宮城に達した。漁夫は竜女と結婚し、幸せに暮らしていたが、ある日、故郷の老母を思い出し、帰郷を竜女に申し出た。竜女は別れにあたり、けっして開けるなといって宝の手箱を与えた。漁夫が村に戻ってみると、村の様子もすっかり変わっており、母もとっくに死んでいた。彼は竜女と会って事の次第を尋ねようと思って手箱を開けた。白煙が立ち昇り、漁夫はたちまち老人となり、死んだ」。(3)

大林は、これと関連するもう一つの中国の伝承も紹介している。

「『搜神記』巻十九には鄱陽（江西省）の張福という男の話が出てくる。彼が船に乗って帰宅の途中、野原の中の川で、美女が笠もかぶらず自分で小舟を操って近づいてくるのを見た。福は女に雨宿りしろと彼の船に誘った。女は福と戯れ、ついに同衾した。（中略）福が月明かりに女を見ると大きなワニだった。福が捕えようとすると水中に逃げてしまった。（中略）ワニとは亀に近い仲間だったに間違いない。『搜神記』のすぐ次の話では、丹陽（江蘇省）の道士謝非が石城（南京か）の廟にワニと亀が住んでいるのを知り、人々が酒や食物を供えて祭っているのを止めさせ、廟を破壊させた話がでている」。(4)

大林や君島のように中国の民話、小説、民俗に詳しい専門家が、浦島太郎と類似した異界の女性との結婚、別離の伝承が中国にあると指摘していることはまったく正しい。中国的な用語や観念が見受けられる点からしても、中国から日本という伝播の系譜について、素人に付け加えられることはない。しかし伝播・系譜と役割とは別の問題であって、何のためにこうした物語が作られ、語られてきたのかを考えておく必要があるだろう。

二　海という異界

海中の異界・異郷を訪問して、不思議な体験をするという浦島太郎や海幸山幸のような説話は日本以外にも各種ある。(5) しかし、説話の分布だけを考えるのではなく、ここでは「異界」一般、そしてその中でも「異界としての海」について、過去にどのような物語や報告がなされてきたか、という大きな問いかけの中で浦島物語を考えてみたい。

見聞きできる範囲以外の外部世界に対する関心や想像が異界訪問説話を生む。その場合の異界・異郷には天上、地下、水平線の彼方など各種ある。その中でも周囲を海に囲まれている地域では、海の彼方や海中に異界・異郷を想定する傾向が強い。その場合、海への関心は陸から眺めているだけのこともあるし、河川での水運の延長としての近海航海から想像されることもある。さらに進んで、他国との海路による交流から生み出される場合もある。他国との海路による交流には、貿易のほか、侵略もある。侵略による勝利の場合には叙事詩が生み出される。しかし、より一般的な交流は交易である。交流としての交易は品物のほか、人間レヴェルでも起こる。商人が商売を超えて情報を交換するのだ。また二カ国の間に知的・文化的水準に格差があれば、平等な貿易ではなく、朝貢貿易となり、品物以外に、知識習得や人材育成の目的で人間も派遣や交換される。そうして物ばかりでなく文化・知識の移動、交流が起こる。日常的な知識だけでなく、海の彼方の世界についての知識が増大する。そして異界の物語自体も伝播する。浦島太郎や海幸山幸の説話のもととなった話はそうして複雑な文化交流の中で中国から日本へと伝わったのであろう。

海洋航海によってもたらされる情報は大別して二つある。ひとつは実用的な航海についての情報集成で、他方は直接航海には関わらない、人々の娯楽としての航海の物語である。たとえば前者としては『インド・シナ物語』などがあり、後者としては「浦島物語」や『オデュッセイア』などがある。

三　航海の知識の系譜

航海の知識の記録は、そうした実用的な海洋航海が行われていた時代に作られるので、どの時代にも必ず存在したものではない。たとえば、ヘレニズム期とアッバース朝（サラセン帝国）の二つの時代には盛んであった。ヘレニズム期の作品としては、後60～70年頃にエジプト在住のギリシア人商人によって書かれた『エリュトゥラー海案内記』がある。紅海、ペルシア湾、アラビア海、インド洋の海洋貿易に関する案内書である。(6)

アッバース朝時代の例としては、『インド・シナ物語』がある。これは第一巻と第二巻に分かれ、第一巻は匿名の著者によって851/2年に書かれ、第二巻はペルシア湾頭の海港シーラーフの人アブー・ザヤド・アル・ハッサンによって916年頃に書かれた。当時のアラブ・イスラーム商人、おそらくシーラーフ商人、にとって便利な南海貿易の手引書であった。(7)「ペルシア湾からインドとマラッカ海峡を経てシナに至る航路上の寄港地、その間の航行日数、飲料水の補給場所、浅瀬や岩礁、強風や竜巻、食人種の住む島、これらの記述は、その地点を通過する船の水先案内の役割をしている。また龍涎香や麝香、その他の香料、薬味をはじめ各地の特産物の説明は、その地に赴く商人にとって有用な

買い入れ商品目録になっている」。[8]

これと関連して紹介しておきたいのが、ブズルク・イブン・シャフリヤールの『インドの不思議』である。この本は、「10世紀後半にペルシア系の船主が当時のムスリム船乗りの冒険談や、彼らがインド・東南アジアの各地で見聞した奇談を集めたもの」[9] である。また別の個所では、「135の物語から奇談からなるもので、インド洋からシナの海を航海した船主、水先人、その他イスラーム教徒の船乗りが、インド洋の島々や東南アジアの島々、それにシナなどで見聞した珍しい動物とか植物の話、またこれら諸地方の住民の習慣、それに難破などで自ら体験した冒険談を加え、帰国後に語り合った自慢話を船主ブズルクが集めて著述した、いわば十世紀後半の船乗りの物語集である」とも説明されている。[10]

『インド・シナ物語』と『インドの不思議』は、成立年代の差はあまりないし、扱っている海域や地域もほぼ同じである。しかし、両者の性格は明らかに異なっている。前者は実用書であり、後者は事実を大袈裟に語ることで聞き手を楽しませようとする娯楽書である。しかしこうした性格の区別はしばしば容易ではない。なぜなら、著者が真面目なつもりでも娯楽と受け取られる場合があるし、その逆に著者は法螺のつもりが真面目に本当のことと受け取られる場合もあるからだ。しかも真面目と法螺との基準が本人にも読者にも定まっておらず、時と場合によってどちらにも変わるので、純粋の実用書から娯楽書、さらには神話的な異界訪問物語という区別は厳密には行いがたい。しかし、それでも以下に紹介するイスラームや西洋人による、インドから東南アジア、中国といった東方世界についての報告は、純然たる異界訪問物語ではなく、実際の航海や交易のための実用書から発展して、娯楽的な要素も加わったのだという点は忘れてはならないだろう。

四　海の異界から陸の異界へ

東西交渉、交易における勢力の衰退と繁栄が異世界の報告にも反映する。アッバース朝は11世紀になるとトルコ系のセルジュク・トルコによって代わられ、さらに13世紀になるとモンゴルが興ってセルジュク・トルコに代わってユーラシア全域を支配するようになる。またヨーロッパでは11世紀末に第一次十字軍、12世紀半ばに第二次十字軍、12世紀末に第三次十字軍、そして13世紀始めに第四次十字軍が派遣され、この結果、東方世界についての関心が大いに高まった。しかし、騎馬民族であるセルジュク・トルコとモンゴルによるユーラシアの支配はイラン系海洋民の船舶による東西交易を相対的に低下させた。そして海路に代わって、陸路のいわゆる「シルクロード」による交易が増大する。異界としての東方世界についての報告は海についてのものから内陸についてのものへと変化し、また、報告者もイスラームからヨーロッパ人へと変わっていくのである。

初期のヨーロッパ人旅行者を代表するのがマルコ・ポーロ（1254～1324）であり、その著書が『東方見聞録』（13世紀半ば）である。この本が成立した事情については、次のように言われている。「11世紀末から始まる十字軍のシリア遠征に伴い、北部イタリアの諸都市はその有利な環境に乗じて、東方貿易に雄飛する基礎を固めていった。ジェノア、ピザそしてヴェニスがその代表的なものであった。（中略）ヴェニスの商人であったということが、画期的な東方への大旅行を彼ら〔マルコ・ポーロたち〕に機会づけるものだったのである。（中略）13世紀早々にモンゴルから興ったチンギス・ハーンの勢力がまたたく間に拡大し、地中海に至るまでの全アジアをモンゴル政権の一色で塗りつぶしてしまった。ここにシルクロードは未曾有の繁栄をもって復活される。ユーラシア大陸の東西を陸路でつなぐシルクロード幹線に対して、今ひとつこれを航路で結ぶ海道幹線がある。この航路も古くは南中国から東南アジアに通ずるだけの局部路線だったけれども、やがてそれがインド洋に伸び、ついに

はアラビア海を越えてペルシア湾にまで伸張した結果、シルクロードと比肩する第二の幹線路となった。熱帯地方に特有の香木、珠玉、象牙、犀角の類をもたらすという独自性がこの航路にとってはかけがえのない強みである。スパイスロードとも称すべきこの南海航路は、唐末から発展を続けることになる」。[11]

『東方見聞録』はヨーロッパと元との間の諸国についての記述がほとんどで、沿岸諸国や諸島部については、マルコの一行が海路で帰還したので、その事情を述べた第六章にのみ述べられている。つまりそれ以前の著作と比べると、海の世界についての記述は相対的に減少している。

マルコはかなり正確に東方の地理、民族、風習を伝えている。それを法螺と思ったのは読者の方である。これに対して、マンデヴィルの『東方旅行記』(14世紀、1360年より少し後)は実地に見聞したと主張するが、事実はそうではない。しかしマルコ・ポーロと対照的に、むしろそのウソが真実と信じられた傾向が強かった。「実用的な旅程の案内書としては、時代遅れで、地理的記述があいまいで、乗り物などにぜんぜんふれていないから、ほとんど実用的価値はゼロに等しいものである。また、作者の意図も(中略)むしろ、東洋の未知の国々の、奇々怪々たる珍習異聞をまことしやかに語って、読者をエキゾチックな幻想の世界に案内し、異国情緒を満喫してもらうところにあったようである」。[12]

マンデヴィルと同じ14世紀には、イスラーム世界では、メッカ巡礼団が各地で組織され、旅の安全が国家によって保証された。そうした巡礼団に加わったイブン・バットゥータ(1304～77)が書き残したのが『大旅行記』(別名『三大陸周遊記』)である。彼はジブラルタル海峡に近いモロッコのタンジェルに生まれたが、その生涯のほとんどを旅人として過ごし、イスラーム世界から西アジア、南ロシア、バルカン半島、中央アジア、インドをめぐり、スマトラを経て中国(元)の福建省泉州に上陸し、北京まで行った。その後モロッコに一旦戻ったが、さらにスペインのグラナダに行き、次いでサハラ砂漠奥地のニジェール川の探検などもしている。この大旅行のうち、インドを出て、インド洋のマルディヴ群島、スリランカ、ベンガル・アッサム地方、スマトラ、マラッカ海峡、泉州までの旅程が海路である。しかし彼の旅行記は、海の世界を異界とは見ておらず、海にまつわる物語はまったく書かれていない。[13]

五　海の物語の系譜

こうした実用的な案内書や旅行記と対照的に、娯楽に力点を置いた海の物語としては、最も古いものとして古代ギリシアのホメロス『オデュッセイア』(前10～8世紀)が挙げられる。[14] ヨーロッパでこれに次ぐ海洋世界の異界についての物語には、アイルランドの『マルドゥーンの航海』、『聖ブランダンの航海』(いずれも後8世紀)がある。[15]

同じ頃、アッバース朝(サラセン帝国)では、上に述べた『インド・シナ物語』のような実用的な海上交易の案内書が書かれたが、それとほぼ同時期に、より冒険談の要素の強い『インドの不思議』も作られた。さらに娯楽性の強い冒険談の集成としては『アラビアン・ナイト』があるが、その中でも海の異界を訪れるもっとも有名な話は「シンドバードの航海」(この部分もまた、ほぼ同時期の8世紀から10世紀にまとめられたと思われる)であろう。[16] しかし、比較の視点でいえば、第940夜から946夜にかけて語られる「陸のアブド・アッラーフと海のアブド・アッラーフの物語」が浦島太郎と興味深い類似を示している。主人公の陸人アブド・アッラーフは貧しい漁夫だったが、ある日、彼の網に海人がかかった。陸人は海人の命を助けてやった。すると海人は海の産物であるサンゴや宝石を陸の産物である果物と交換したいと申し出て、そうしてもたらされたサンゴや宝石のお蔭で、陸

人は大金持ちになり、話を聞いた王さまによって大臣とされた。陸人は海人に招待されて海の底にある国々を巡り歓待された。しかし、海人の世界では葬儀は賑やかに楽しく行われるのに、陸では悲しんで泣くと聞くと、海人は怒って、陸人との交際を止めてしまった、というのが概要である。[17]

海人は最初、陸の人間と異なる姿とはいわれていないが、陸人が海の世界で出会う海人たちは、「手と足がおなかについており、魚の尾と同じ尻尾をそなえて」いるとか、「何も纏わず、全員が裸」とか、(女性については)「その顔は月のように丸く、長く髪を伸ばし、臀部は重く、瞳は黒く、腰は細くくびれていましたが、やはり素っ裸で尻尾が生えて」いたと描写されている。日本神話における亀やワニほどではないが、海人はやはり地上の人間とは異なる姿をしているようである。そして両者が友好関係を結びながら、最後にはやはり別離に至っているという点でも浦島太郎や海幸山幸の物語との共通性が高い。

六　再び海の異界

15世紀末、グラナダが陥落してナスル朝が滅ぶと、スペインからイスラーム勢力が一掃された。この時期はまた、1492年のコロンブスの第一回航海によるいわゆる「新大陸の発見」や1498年のヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見が相次いで、イスラームを上回る世界勢力として自信を持ち始めたヨーロッパが、航海によって異世界の富を収奪する植民地化に乗り出した時代でもあった。そうした動きはスペイン、ポルトガルからすぐに他のヨーロッパ諸国にも波及していく。16世紀にはポルトガルがアジア方面に、スペインが中南米方面に進出し、貿易拠点を握って植民地を建設した。17世紀になるとオランダ、イギリス、フランスも積極的に貿易と植民地化を展開しはじめたので、17、18世紀にはヨーロッパ諸国間で植民地争奪戦が行われた。この戦いの最後の勝利者が英国であり、18世紀中頃にイギリス海上帝国が成立した。

ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)は黒人奴隷をアフリカで買いつけて、ブラジルのプランテーションで働かせようと目論んだ男が難破して、オリノコ川河口の島で一人生き残るという物語だが、もはやそこは異界ではなく、難破船から持ち出した火薬や武器や道具によって、自然を征服し、文化を創造し、自らの行き方を邪魔する現地人は奴隷にするか、あるいは殺害するという極めて植民地主義的、帝国主義的態度が貫かれている。もはや異界の物語は成立しないのである。[18]

七　おわりに

未知の領域が空想を育てる。航海術の進歩、航海域の拡大が未知の世界を既知の世界へと変えていく。かつては空想の物語の領域であったものも、事実の報告の対象となる。知の体系化が進み、異界は次第に消滅していく。事実の集積としての知の体系による説明は未知の世界の空想的解釈である神話の領域を侵食していく。そして文学においては物語から小説へ、未知の世界から既知の社会へ、あるいは個人の内面という未知の世界へと対象が移り変わっていく。

浦島太郎や海幸山幸の物語は、海洋世界がまだ未知の領域であった地域と時代の産物であろう。中国では内陸部の湖や川において水界という異界の生物と出会うという形式であったが、日本の神話や伝承では海の異界訪問という風に、土着化によって少し変化が生じた。それは海を航海するとか、海の資源を列挙するという目的で書かれたものではなく、浦島太郎の詩や物語であれば、出会いと別れという普遍的な文学モチーフを、浦島の場合には平民のケースとして異界との交流の失敗として描き、山幸の場合には王権イデオロギーのケースとして異界存在との間に子孫を儲ける成功例として描き出

したのであろう。『アラビアン・ナイト』の陸人と海人の出会いと別れは、男女の交わりに厳しいイスラーム文化の物語らしく男と男の物語となっているが、海の底の別世界訪問という筋書きも含めて、おそらく中国以外の海外における浦島太郎物語の類例としては、もっともよく似ているといえるだろう。両者が8世紀という同時代の産物らしいのは、まったくの偶然なのであろうか。貴族を担い手とする都市文化の開花、そしてそこで海という未知の領域を舞台とした物語が誕生するという共通のプロセスを想定してみたらどうであろうか。

注

1　居駒永幸「浦島型」、大林太良・吉田敦彦監修『日本神話事典』大和書房、1997、74～75頁。
2　三浦佑之「浦島説話」、大林・吉田『日本神話事典』76～78頁。
3　大林太良『神話の系譜』講談社学術文庫、1991、(「中国内陸の水人たち—浦島と海幸山幸」71～76頁）の74～75頁より引用。
4　大林太良『山の民　水辺の神々—六朝小説にもとづく民族誌』、大修館書店、2001、30～31頁より引用。
5　ワニとカメについては以前に考えたことがある。松村一男「ワニとは何か—日本神話の動物誌—」『象徴図像研究』(和光大学象徴図像研究会）Ⅲ、1989、37～51頁、特に45～47頁を参照。
6　村川堅太郎訳注『エリュトゥラー海案内記』中公文庫、1993。
7　藤本勝次訳注『インド・シナ物語』関西大学出版・広報部、1976、2～3頁
8　上掲書、5頁より引用。
9　藤本勝次・福原信義訳注『インドの不思議』関西大学出版・広報部、1978、序より引用。
10　上掲書、4頁より引用。
11　マルコ・ポーロ（愛宕松男訳注）『東方見聞録』一～二、平凡社（東洋文庫)、1970、第一巻目、訳者解説、337～340頁より引用。
12　マンデヴィル（大場正史訳）『東方旅行記』平凡社（東洋文庫)、1964、解説、281頁より引用。
13　イブン・バットゥータ（家島彦一訳注）『大旅行記６』平凡社（東洋文庫)、2001。
14　松村一男「古代ギリシア人の深層表象—オデュッセウスの帰還—」『イマーゴ』7−5（1996)、122～129頁。
15　鶴岡真弓『聖パトリックの夜—ケルト航海譚とジョイス変幻』岩波書店、1993（『ジョイスとケルト世界』平凡社、1997）
16　松村一男「神話学から見たシンドバードの航海」篠田知和基編『竜宮・蓬莱・アヴァロン島』GRMC（比較神話学研究組織)、2002、110～114頁。
17　池田修訳『アラビアン・ナイト１８』平凡社（東洋文庫)、1992、53～89頁。
18　松村一男「比較神話と文化史—『オデュッセイア』『ロビンソン・クルーソー』『ユリシーズ』」『東西南北』(和光大学総合文化研究所年報）2002、42～50頁の45頁。